繪本豐臣勲功記

六編 十

へ遠13
2209
60

へ遠13
2209
巻 60

繪本豊臣勲功記六編卷之十

目錄

秀吉送愛子安藤家歸路
屬謀略長濱
本能寺追福席細川連歌
屬賜官秀吉

欲紫野修大夢禮招諸侯
屬各擬執柱
福島不堪憤怒欲殺賭家
屬紫野分撥

繪本豊臣勲功記六編卷之十

櫻澤堂山 編輯

秀吉遣愛子安勝家歸路 屬謀撰長濱

兎罕とゆ龍と擒らんとまる。如何でう昭と獲るとたらんや。然べ胴柴筑前守秀吉は。清洲より發足せ。廿二日の殘月の月。宣へ晴ると法月の光あきらかあるべきれば。六丈張灯長多炬。稲葉を近くあるまふ。夜ハ曙くと曉滴り。八町之町の程と隔て。村落あるん山背。篁叢樹樹ふ繞てより主君の指揮と被ゆ。等近くゆる羽柴ゆ家。次第ふ加添く。墨服卒服の機命ハ。八千除人を追びける名。佐久間ゆ這驛ふ出命とも。月ふ蟲と吐えんと。日ふ礎と當ん

とさるに等しうるべし。斯のごとく堅固なるに。長濱の城ハ
投つるものと。天魔波旬ぞ調へるべけんや。
然ば清洲ハ殘りなる。猪家一益も將も持國の合戰ところ
ハ累れば。清洲ハ淹留もなるべきにて。濃州ハ東海道より。
上野・當く歸國なるせば。柴田ハ近江路より。本國越前ハ
歸らんとて。清洲を出しん仝ト月のせ又日。濃州ハ岐阜ハ
著しつも。這訳く當て終夜。熟く行方と沈思る。國ろ色
より伊吹と號ぶべ。江北の地さ入るものと。これまで種くの
方郷と遊へ。秀吉と大く惱しなれば。偏ろぶ行方を秀吉ハ。
繰られりやもと屬意。途中ハいるある罠のかりる。惱まさ
もん事もわん歟と右や左や做ずと思案ハも

思縛せば輪念ねど。身も振のまで最悔ろしく。自己を
心ハ怒りる。進るもやられまを退ぞれもせば。慄ぶ
這驛ハ。逗留まる緯ニ日。時ハ秀吉ぶ這頭邊を潛ハ
窺まる兵士の。此彼ハ又事あるぶ。やもやるも柴田ぶ這
處ハ。逗留るせ一緣故と賠り。長濱の城ハ走驛り。猪
家ぶ事と告られば。秀吉とれ紙聞しめされ。靈然とるく
笑ませ玉ひ。柴田ぶ名を勇士ぶ。おまろハ臆せ一
心騰る。若び招ぶんしめるれば。安心なきせて通させられん。
と於次丸秀勝と遣さされ。蒲井又太郎を使者ぶ。
勝家ぶ旗亭なる。蒲井の陣へ來行るそのロとハ。活る
時節ハ。總く世の風流も。種くる。言語せども。筑前守ぶ

筑前守
於次丸と
人質ヲ
遣ハ
勝家ヲ
安途
あさ吉も

心中ふかいくハ。只下へ対し〳〵称し。異心と存ずるものもこ繰出。此ふ国〳〵悪子秀勝とめく。人質となし〳〵せおくれば。城茶すでも捉体られ。安心せ〳〵れく迫に落と。通行おれと愁歎ふ。栗送られられば。勝家大ひふ歓悦ゐ〳〵。人質秀勝を伴ゆく。城茶間へ帰りつ。鱗〳〵同国丸岩へ使者と遣さ〳〵。城を伊賀守勝豊ふ命じ。江州長浜の一城と。收拾づきも言行られば。書文の命と黙止ぐ〳〵。その准備をぞ成〳〵。斉も這柴田伊賀守勝豊ハ。淀川八幡城つ豊定（善連門家の四郎）の子なり〳〵。勝家これと養子とせり。養父勝家ゐ所志の。特ふ暴候なられば。決意ふこれ城栗撰〳〵ぬ。されば。秀吉ゐ深慮ふ。通ふ勝豊と自方〳〵〳〵む。ゆ〳〵〳〵繰すで賢〳〵〳〵。然りとふ伊賀守勝豊ハ。宰家徳永石見守。木下半左衛門。與力ふハ足田左近。大鳥大八。山路将監。神山城中守係と跟従く。七月六日本城ゐ。城茶丸岩を発城〳〵。江州長浜く帰〳〵。命ゐ〳〵。然〳〵。偽〳〵妻子と。率俱〳〵〳〵る。単ハ最稀ふ路ゐ〳〵せてぞ登り〳〵る。新〳〵城茶ゐ秀吉ハ。備ふ長浜く帰城せ〳〵れ。城代湯浅甚助と呼され〳〵宣ふハ。這遺黙止ゐ〳〵き義〳〵つき。這城とも〳〵勝家ふ。儀遺も約生せり。城浅頃ふハ柴田ゐ儀子。伊賀ゐ勝豊ゐ来ら〳〵る繰〳〵り。勝豊来〳〵ば異儀〳〵迫ぶ。縷と畫〳〵て撰ぶ〳〵〳〵。ど深き奇計を相繰〳〵れ。

七月五日の寅の中刻。長濱城を発し、寛くそこ
向都しるべ。朝く濁酒基助に。君の命と仔細ふ承く
其日のうちく長濱の。街生價と招き倚せ。それがゆうふも
古老なる商賈と撰ぶ。這門くへ密くふ。紆畧と言嘱め
くるに。這邊諜田伊賀守。惡意を長崎まるふ足跡なく。這城
をもて撰ぶれども。これに備日の際まるく。又此方の案地
とるらんべき。方術に既ふ遇くこれど。門くの搭次先。忠勤と
抽なば賞褒賜に相準敵より。堅ふ信せ玉まるべしと
熟く其意と覚悟まるふぞ。つづもこれまで秀吉が。仁
義の政事ふ帰依しなる。幼度柴田が案地と為る成。
稔くる晩に大ふ歎き。純や辛き命彼らとて。挙て慈

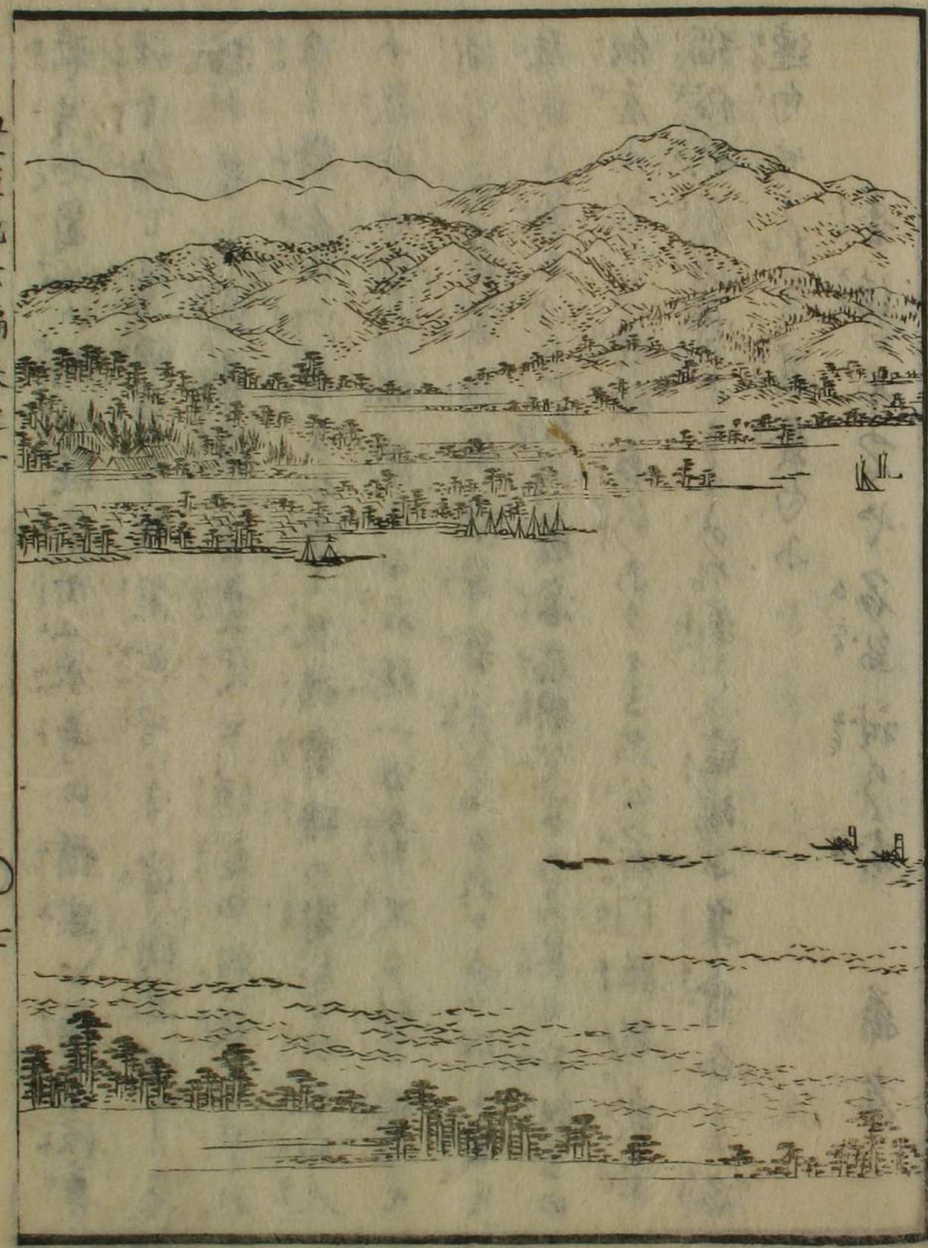
ふ沈くしるべ。方便朝言中くに基助が承命と受身たるそ
安途の懐念とるし。暁秋び一回ふ腰絆とせるるりぬと。各く
情くに言繰せ。當晩とて等立る。后ふ賊ヶ嶽合戦
の機會ふ蔑く。長濱順の街
街支舞と。近江の庶民嚴寒く
力と編く秀吉ふ。荷擔なせしも這晩よりして。固礎せ
事なりこそ。備も柴田伊賀守勝豊へ。四月路丸長濱城へ
て同月十日。ぞ年なるね當天。長濱より帰て
城中へ。朝と通達しけるぞ。當濱代濁酒基助。縁て内意
と受されば。速ふ伊賀守と出迎く。上个の疑対穏義と為し
て。慰勇く君命と証。内外の雑用缺役等。命所られ
あるべしと。残るかくるく信と頼し。城と戻く快快。遠ふ

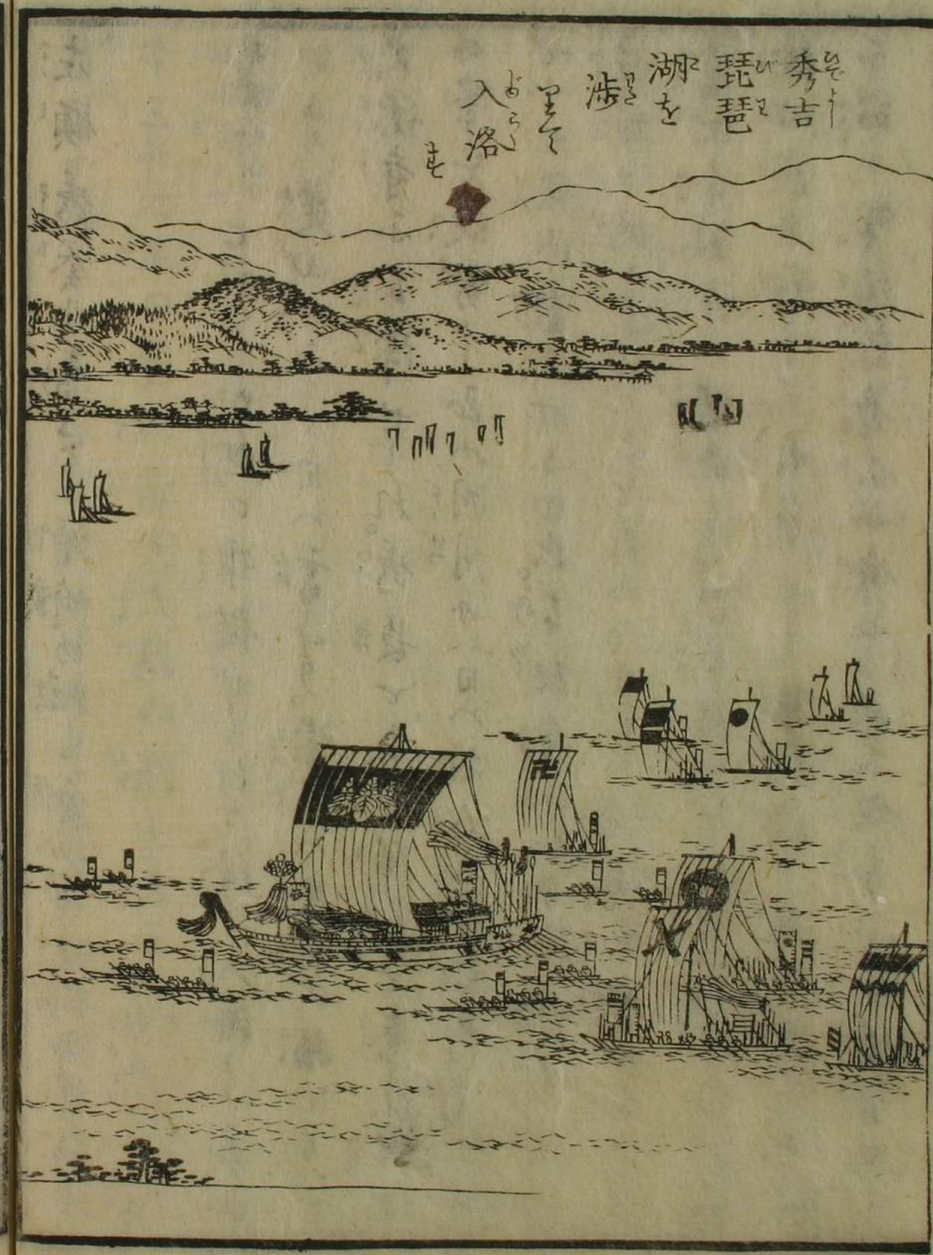
ふそ。柴田勝豊始め。秀吉仁義の厚きを。湯漬墓助が
殺纏の重なりけるを。感佩せらるゝ事なふ堪と文
頻なり。これ不因く湯漬墓助。翌十日長浜を退散し。道路
を急ぎて上京しけり。

本能寺逗留細川連歌屬賜官秀吉

兎角を殺しこれ程遠ざかるの教と義ふ羽紫紙冨守秀
吉へ。柴田勝豊。長浜入城ふ先ざる日。七月廿日の未暁に
長浜の城を捨せられ。今さて仁恩ふ澤せれる。士農
工高ふ。ゐく。巷里ふ迎送しけるが。信和より来紅
せられ。綿帆風を追ふ。殘る暑熱も快く。行生島を
背ふ紅し。多景嶋沖爲。長命寺終勝の地を右顧

左顧。秀吉ふ舊ふる辛崎の。松も金地の寸樹ふ異なる
ず。三井ふ来の清鳴當天。大津の浜ふ出ふ。信和山より大津まで一十四里
作和山ハ今の彦根城是なり
これより炬燭の準備せられて。徐く入浴しふ入
けるが。興田ハ早く日ハ暮れり。當嶽ハ先日の格とりて
大德寺ふ本陣せられ。秀長と中納言秀吉と奏し。家臣
の事と改勢しふ。同月廿一日ハ故右大臣殿御父子の
四十九陰ふ當りけるゆゑ。本能寺ふおゐて御逗留の
法筵と開かしめんと。七月の六日より這緯を命せられ。
舊地本能寺ハ燒失とのひ。先君御自害の蹟なれば。
徹田家ふ對し不吉なりとて。承諾通り押小路に。易地
を賜り。降須賀。青木ふ命せられて。候本堂と造營な




秀吉琵琶湖を渉り
まつて
入洛
を

茶後七箇日の間。日蓮宗十五本寺の僧衆と請じ。法華経千部と讀誦をなむ。筑前守より寄附ありしとぞ。播州米千苞。青銭一万貫文と法華の布施とせられ。全く精舎の門前まで。孤獨貧賤の者。ならびに凶人ふ旅共せらるる。絳茶又百石銭一万貫文。それ〳〵ふ順じて諸度遣まで。寄附捐旅等最多くなる。それがゆゑふも最も殊勝よ殺えなる。細川藤孝忠興父子なり。其日を紙ちの能屋ふ。おいく。連歌奥行ありくるが。公家。門跡衆。武家。緇俗。歌道の者。あるとものハ。筆ふ。這場ふ集會ふし。各連句せられう。其發句ふ

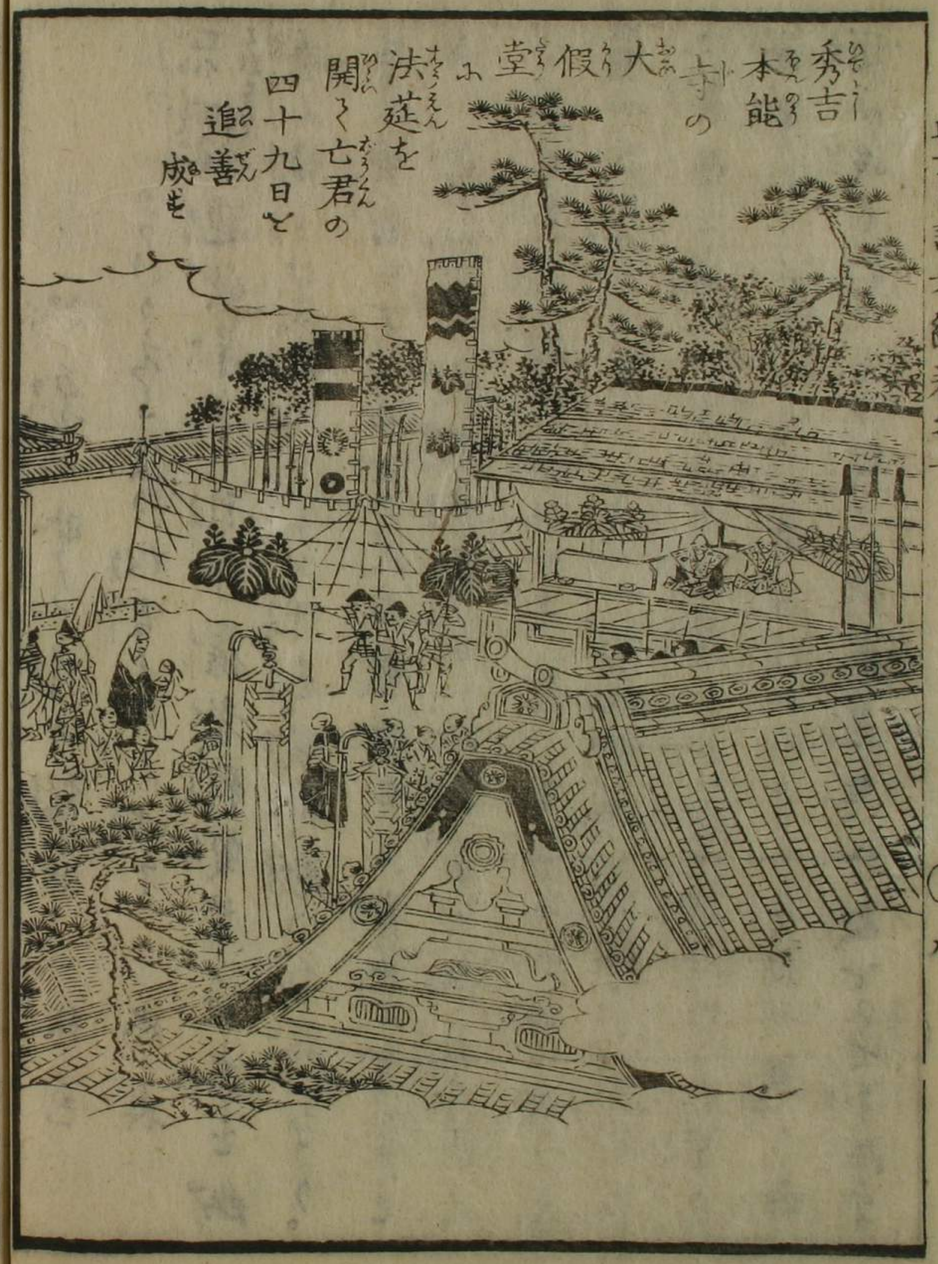
墨流のやめぐや名残神の〳〵家　藤孝

祝ふる時の身の栄ぇぜ　紹巴

つらけうえる陰の松ぞ〳〵　忠興

巳小百員
これを暑す

連歌年〳〵刑部藤孝。利鼎せ〳〵れ名を幽
亦と號しける。細川父子が所志。最神妙の動静なり。
〳〵秀吉とたゝめ世の人も。感嘆する輩多かりしと
申ん。然ば羽柴筑前守秀吉ハ此退屈と御行〳〵〳〵
より。先君恩顧の諸士ハ更ふ。禁庭のお沙〳〵ハ
最いとふ厚〳〵まし〳〵〳〵。こ公九卿御高位のうへ秀吉
へ官位と賜るべきもの。幾遍ふ内裏へ召させ〳〵れ重き
勅命ありしとぞ。亡君没後のわども立ねば。漸〳〵辞
退ふ迫でれるが。推〳〵傳奏花鳥井殿とゆて。下沿る


秀吉
本能
寺の
大
假
堂
ふ
法莚を
開く亡君の
四十九日と
追善
成ぜ

其勅書ハ

去来六月信長父子入洛之不明智光秀企謀叛於四条二条〻両殿弑逆之事 前代未聞〻狼藉無是非次第也 其刻秀吉者西国征伐出陣〻不取不移時日馳登令誅戮明智逆徒而天下隠之者平〻 保有武勇者孰人比此乎 依〻雖有官位〻 全職度〻辞退 仍重而昇叙 叙爵少将之義堅依大機執達如件

天正十年七月　　左少将春時

羽柴筑前守殿

這上ハ辞退も恐悦ニ奉存ハ 御奉ハ 秀吉 密ハ 参内ニ 則従四位少将ハ任ぜられ。舎弟長秀長ハ 従五位ニ 賜ける。然ども思ひ掛なき儀ニ 驚き。他国の御沙汰なきもうもと。預入〻 退出せり。

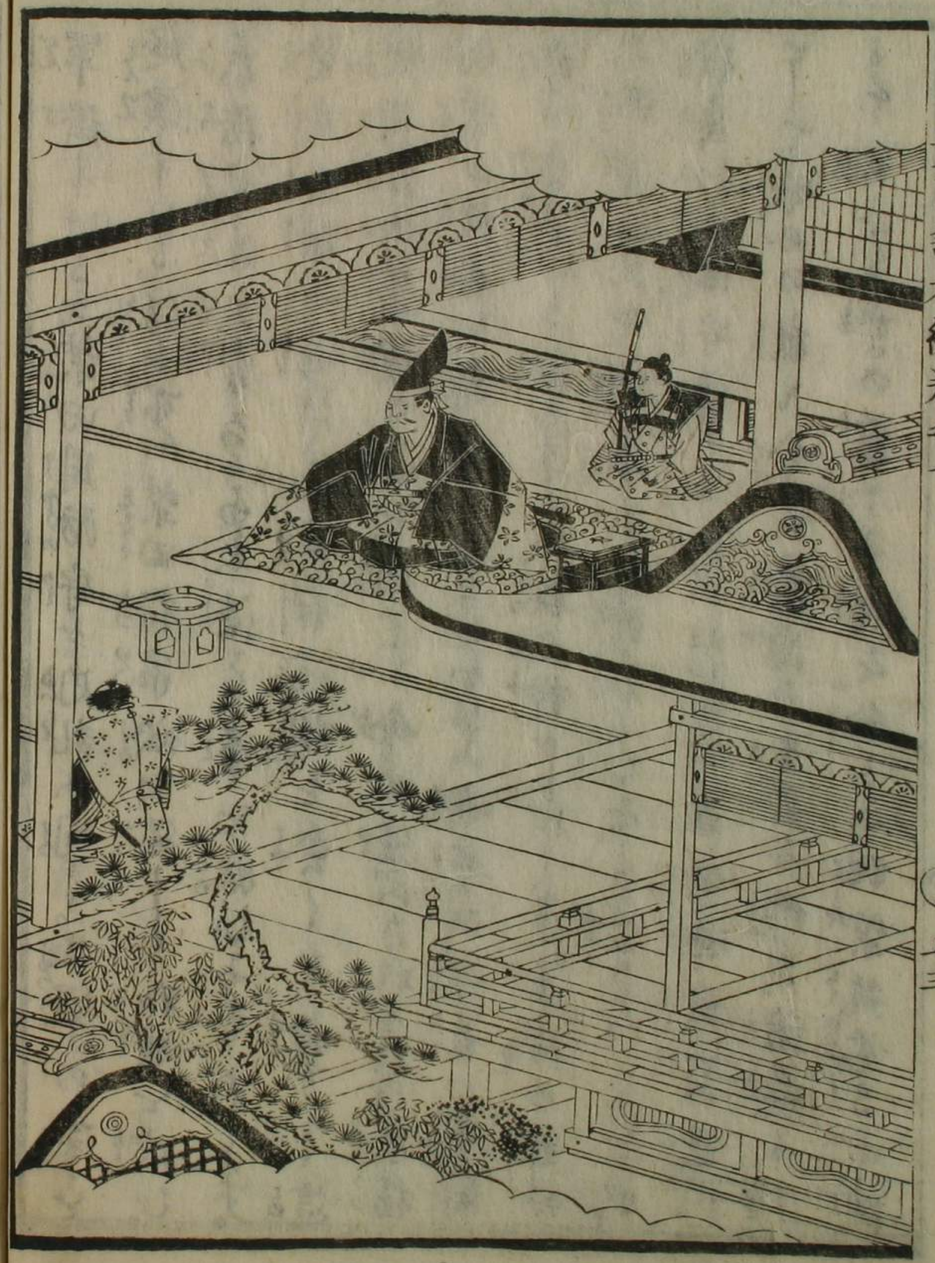
欲紫野修大葬礼招靖庵 属 各擬執槍群雄肉ニ 軍〻。都〻虎ハ 棄〻。備も 後巻ハ 秀吉へ。暫日ハ 洛ハ 京都の政事ニ。舎弟秀長ハ 傳執なきもの。其身ハ本国姫路の城ハ 帰られ〻。 況氣ニ 害ハ その障ハ。工夫十分ハ 成就〻 ならば。今ハ 領国ニ 帰る。播丹国備の軍勢のうち。十万除人ニ 擇出して。国ハ 属ね 中国上洛をぐ〻と 這等の詞ニ。黒田。深田の靖庵ハ 命じ。

自然ハ九月辰の朔日。先達て上洛ふ遂ぜられしより。是ぞ
今般紫野大徳寺ふおいて。亡君信長公の御葬式を
修行まくしと。諸将ともこれ我高説せられ。縁その准備
を設企らるる是。秀吉の大智を器しく。深恵の醍もこころ
ゑれば。大日本ども感動るるもむべき。大法遂とぞ知られ
ける時ふ秀吉諸邦へ使節を達られ。右大臣殿御葬儀
の義と。徇遣ぞ。徇くふふ北畠中将信雄卿神戸侍従
信孝卿。柴田道化勝家。佐久間玄蕃允盛政瀧川左近
将監一益池田勝入斎信輝丹羽五郎左衛門長秀。蒲田
又左衛門利家。佐々陸奥守成政。森勝蔵長一。中川瀬
兵衛清秀。高山右近長房。滝川伯耆守国益。筒井大和

入道順慶。細川幽斎父子。其外竹中。不破。金森。溝口。多
賀。中条。山岡。蒲田家恩顧の門々ハ。大名小名ふ拘
らず。悉く徇命せ。さて外属門の諸侯ふハ。毛利
右馬頭輝元。吉川駿河守元春。小早川左衛門督隆景。
上杉弾正少弼景勝。南條。小鴨。ご好條ずでもの〳〵使者
と遣ぞ。所葬式の徇と勧じ。然るふ柴田勝家ハ。
本国府中ふ在住しく。這使者と聞。心中おわひふ驍悦
ゑ。偽ハ秀吉。自己ど接威と。衆人ふ。知らしめんがための。
設企して。故右府の法事と修行まるるん。吾ふ不なんぞ
其縁対の根本と知らざるんや。然ば羽柴ど方御ふ属
て。吾も方御と行ゑん。這般焼香の機会こそ。僥倖。

羽柴殿
御葬禮の使者と諸方へ遣ハさる

之法師丸と退退け。信孝卿ふ才一書の。燒棄せさせ。是ふ〻織田の家督と定めつれそのほとと執柄ゐ。然〻羽柴と張戰し果せ。日東の遺恨と散ずべき事。這一場ふ過べ〻ぞ。加之天下の諸侯ふ名威光と輝し。四海を畏の奥とゐん。然〻と いつても上國し。筑前守と歌とせんゐ。上杉景勝ふ和睦ゐし。攻取さる城と城後へ返し。和と綱つ〻出東熱び。上洛さべし。柴田。佐〻。佐久間と備ふ義ゐ。京都と當し〻馳登る。茲ふ上杉景勝ハ。弱年ゐれども强勇ゐれば。京都ふおい〻信長父子。亡び〻。其隙もわ〻で。明智の滅せられさる虛ふ乘じ。歌國を攻んと軍滅しけるゞ。柴田周防守ゞ内乱ふ関く。出軍の事と延演しける。洛る而〻柴田勝家城と返し〻和睦と求む。京勝元秀大勇ゐる而ゐ。強く事と好むゐも。あ〻ず。蛍耶和睦ふ追ひ〻る。秀吉這緯を蛍くも悟り〻這般故君所義禮のゐと。同じ〻命せ遣ハされれば京勝羽柴ゞ使者と得〻。これをあわひふ朝蛍ひ。信長ハ是國邪と軍ゐ〻る歌ゐし。其大將ゞ死し〻ゐ。何の親好ふ弟禮せんや。剃髮京の秀吉ふ。こそと。京さられるゐと。執種直江山城守進〻出。然ハ。ゐ〻ゐる當時戰國の通風ゐ。明日の歌も今日ハ肯内の主君と作ぎ。諸侯も个りて居さる幕の幕ふ屬さ。然〻ふ羽柴筑前守中國



上杉景勝
羽柴の使者を
得く上洛の綜と
商議せらる

ふ毛利と和睦し。山崎ふへ一日の合戦ふ。明智を悉く
滅ぼせしん。驗ふ天下をして驚動せしむるの挙止ありき。今
亦之家と補佐する料理。感ぜるふ猶除りあり。然るふ
亡父の葬禮なりとて這方へ使者を遣はせしも。其理
もっともなきふあらずと。一揆紫田と和睦しられば。信長ハ
天下の武将なり。然れば天下の諸侯ハこれを同紙まぐべき
筈なり。父君ふ議院謙信公ハ。信義を専とし。ふひし
なりしに。他の喪を見てこれ幾攻るハ。名将の為ざるところ
剛や當家ふおゆるしもや。秀吉胞せまぐ讃を呈しく
稟納されるものと。這方よりも吊義の使者を遣られ
ぞんばあらべうしと。絢氏ふしく稟をあぞ。亦務験ふも

と緒文申。遣べき使者ハ誰可らんと樣ぐれけるを
直江景継。這遺信長の法事ふ就てハ織田家の
親属幕下の軍士で。孫〻も集會をべくられば。吊使と
呼して隔密ふ。織田家の强弱を試りふん。秀吉実
ふ其機ふ當べ。幕下となりく永久の謀計をつ
すべん。謀べき欲ハ逆ふ酬。聲べ〻ざるハ決して聲ざる
是と良將ハ言すなり。這遺織田家へ吊使の任ハ
誰渠と擬ぐんより。乃ち上京つるなり虚実を窺ひ
めるべし。と羽柴ぐ深意の底を視貫し。山城守ぐ
明察ハ。実ふ上杉の謀士なり。大將亦衆ふ大ひふ悦び
白浪三十枚と番頭となし。直江ふ吊使の命を傳く

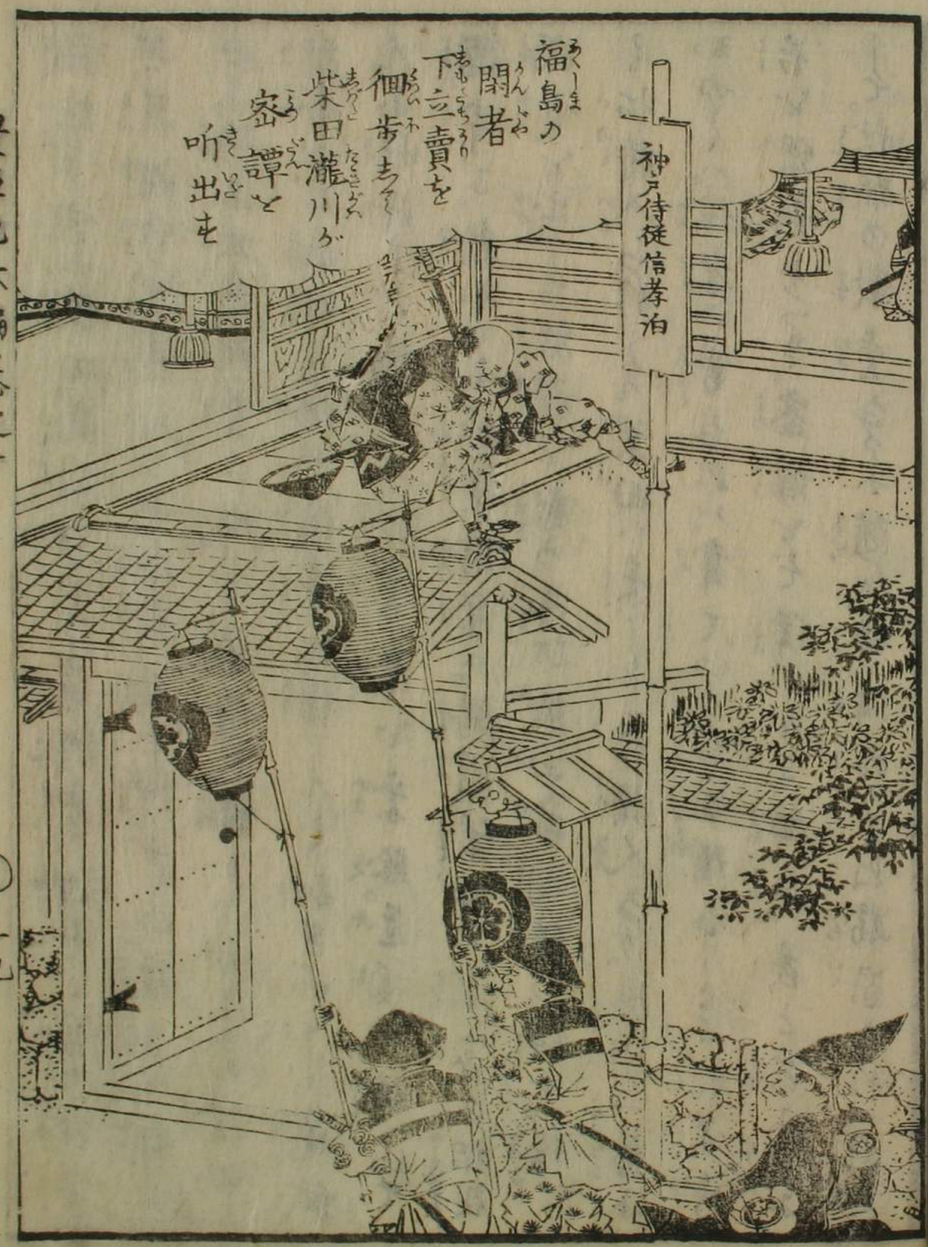
京都へこそ登りこれ。備赤上州廃城多し。濃川左近将監一篇も。羽柴が修葺の使者と婿と。心の中不思議なり。是い柴田羽柴の両個が。撞と執らんと威勢と拳よりのるべし。吾今迷ふ上洛を。楽侮が議論を忽所不見所し。柴田ふも膂力と勢せば。羽柴よい猶更あり。国この緒産舎集しる其中ふて。吾宏量と衆ふ乗し大猿天下ふ執政せそやと心中丈ふ驍悍び。是も上洛しさりける。これふ国て洛中の調あるるさるべけるが。脱已ふ上京あせし。神戸信孝。北畠信雄。その外織田家新古の家臣。倩又外属門の名代ふ。毛利家より福原越後守。小早川より中鴻主馬助。吉川より谷川市支。これらの使者を敵らしし。近国近在一郡一村の主まで。伝長その奚弐と。羽柴敵が修行もし。略と等しし。これも系しり。羽柴敵ふハそれ〳〵ふ。行今もらしも缺らこそ。上杉。毛利。筒井。係の入洛とおの〳〵出迎たせ。其姓名ふ随のらく豫く投けし旅宿〳〵。名字と記しく最言く。宿徴を立ものも。導指をのらくこれふ投しも。略なく賓頭ふしけらふど。名代の使者もをが随ふ。番頭法枝と呈秋ぞこと。恪しあど言量ふ。不得ふ解き洛中の通路〳〵門〳〵陳地もあしせば。擢ふ陣幕。漁長柄其家〳〵の職旋。徒選賞しと立連ね。送迎意対尋常ふしば。靖方の名家織田の功臣。こそ一世の繁華ふりと。連ふ除すば芳る

諸國の
帝禮使
京都ゑ
群參
賜繋

ずと。食を外に威と振くび。京洛中の商史事。是に乗じて利と得るあれば。又往来を止られず。途に行旅の事もありて。東西南北上をわつて混じ合。山嶋谷も暮るゝうに。見場しうりける所相多り。

福島不堪憤怒欲殺勝家屬蒙野分撥

日食那ぞ堪へん万法と費せことと。関門豫屢寄三千。と吟じるも。斯やと看成そ京都の所主。頭〻驚くる甚が多に。神戸侍従信孝へ。中立賣に旅館せしゝ。これに隣る小立賣に柴田勝家が本陣に。信孝密に勝家一益と強盟に招き。強くより特置る。家臣の緒と彈せんと。潛に使者を遣しに。勢に相柴秀吉へ。内外の緒に虚實なく。日数を領ぜ心を賦り。不紀すも過失なく。夜警行るゝ別て嚴しく。析敲と鳴して通地巷地とも。弱も御らば徘徊るさしの。武へ情子と潛行しめて。洛中洛外に多るまでよくその見聞を通紀せる事。六神通と得るる如し。時に情子の役と蒙り。中立賣を潛歩せる。二個の駿乗にて。是福島正則の孫の兵に。奉止殊に さしれば市松平に情を加へ。又是の像く別しる太郎他。次郎他といへ兄弟多り。数へすば間の中都住て人の往来の繁れば。時至らばと做考する。通地の那方に張竹三に張。此方へ来ると密と視れば先に照せる目盛へ双雁金の紋にして。後より来るに立ち止多り。是に立奏に


福島の
閑者
下立賣を
徊歩き
柴田瀧川が
密譚を
聴出を
神戸侍従信孝泊

旅館しるる。茶田。洗川ゑりくるぶ。何方へ往そと問も故と
ぞ。其往方と窺ふるに。西度芸に神戸の。旅亭へ投ド
ゝり。時に太郎他業に呼き。渠傍い頭ゝ苦ゝしぬ緯の
殺合ると耶叫る。倘や椿事と緯ゝんも知るかゝ。窺試
んに快行よと。背門の方より屋と家論。屋頂と傳ふて
潜寄る。熟ゝぐに侍従信孝い。洗川。渠田と深山に招投。
酒肴と出して旅情と慰め。再び織田家相続の緯と。緯ゝ
も怙特入られゝり。茶田ハ素より荷擔人ゝり。洗川一番に
かゝゝい。信孝の曙ゐれば。嘗ているむ不得ゝとて羽柴秀
吉と線戦もづき。密謀とぞ緯ゝる。碓情疾と芸に蘭に
して。獻酬の數重ゐに随ひ。碓碓好ゝゝ勝家ゐれば。自大

我慢の話緯より。過し日清洲の集会に。流義と尊しゐる
始終と高ゝさも慣ゝゝく緯続けゝ。青柳ゝ胡蝶に
情子の兄弟極先に在ゝく。落もかゝく是と論取り。或い数次或ハ
嫌り。いそぐゝく取く逃し。自人市松に告叫。性質大急の
福島正則。是と聚より望も嘆く。因に一度に蠢く滿張
羽丈の縁ゝ。ひに聽り。呼とれ勝家何者ゐれば。君を
斬て尊しぞ。飛令大切ゐる所逃吉の機會すて。夜し
て謀恐ありがゝ。茶田が旅宿へ臨投。渠奴が素頭拙
剣ゝれんと。捻搦緯ゝ駆出もと。やれ侍正則。廉忽ゐると。
同ゝ駆出。拳止るに加羅虎之助清正ゝり。漸ゝ捻を素
拉り草拐搏で下に産ゝせ。君快より汝に命聆らる

福島市松
怒ふ堪ぢて
柴田勝家を
殺さんやうに

後あれども。母が性の急なるとおぢきれ。医させ申しところ多し。君もく新まで市松が心を安せ申さそや。かるくもぐく後の為と抑めよ。結まるべしと制止しくれど。粗氣の如くに暴起さく更に後もくざるところ。帷幕の内に彰高く。大浪市松感じ入る。甚忠憤と一日堪へよ。後まれもと命放つも。発出申さん後は任が將。秀吉の忠臣五二の福島に則かも。すべ頭を地に投じ命いうと伺へ。秀吉近く招待申し。福島が耳に口嘱。密意と快と謀させ申べ。此に深もあり。けるに市松。吾と言もく覚示と笑ひ。怪細に承知つるく。ねど敢聽て後有せもく。虎之助も這に安途し。君の背後に踏跨せり。然もく其後羽柴筑前守。黒田。蜂須賀。浅野。大谷。神子田。但馬と呼侍られ。計謀と謀られく。醍醐山科。舟岩。梅津東寺四塚。西の岡。その外に方へ埋伏させ。沖藝禮の當日と。そや来よくと。待設さりしに聽すくこそ。有え。ありき也

繪本豊臣勲功紀六編巻之十終

文久三年癸亥正月出版

編輯者　東京　櫻澤堂山

畫工　浪華　松川半山

出版人　大阪書林　岡田茂兵衛　東區博勞町四丁目

同　同　松村九兵衛　南區心齊橋筋一丁目

發賣人　東京書林　山中市兵衛　芝區三島町